



George Washington Bridge and Upper Manhattan

## 日本人デザイナー

アメリカに来てからあっという間に七年半が経ちました。アメリカでの時間と経験を得ている間に、私は日本でのそれを失っていることとなります。それでも私はいつまでも日本人としての人格を失うことはなく、むしろ日本にいるときよりも日本という国と私という個人の関係を考えているように思います。昨夜も日本の夢を見ました。ニューヨークのアパートで日本の夢から目覚めるとき、ニューヨークの現実こそが夢のようです。

ニューヨークでデザイナーとして働いていると、私には常に「日本人デザイナー」というレッテルがついてまわります。デザイナーを選ぶ立場の演出家たちにとって「日本人デザイナー」は一種のジャンルのようなものかもしれません。私が日本人だからという理由で声がかかる仕事もあります。また、「日本人デザイナー」であることで日本の話題が会話の導入に使用されることが多く、いつでも日本のことをしっかり話せるように勉強しておかなければなりません。ラーメンがニューヨークで流行っていたり、チェルフィッチュ岡田利規氏の戯曲がDan Rothenberg氏の演出によって公演され注目を集めたり、日本はニューヨーカーにとってもよく知られているのです。

「日本人デザイナー」はアメリカ人デザイナーと比

べてどのような差があるのでしょうか。照明業務は共同作業であり、舞台・画面にどのような明かりが再現されるかは人間関係が大きく影響します。そのため、日米で同じ器材を使用している、使用する人達とその関係の違いにより同じ明かりがでることはありません。アメリカ人は自己主張が得意なのに対し、日本人は相手の話を聞き意図を読むのが得意です。アメリカ人は臨機応変で日本人は用意周到、アメリカ人は挨拶の次に「今日のドレス素敵だね」と言い、日本人は「ちょっと太った?」と言います。コップの水の量を見て「半分ある」と見るアメリカ人と、「半分しかない」と見る日本人、こんな違いがすべてデザインとコラボレーションの経過と結果に影響するのです。もちろん「違う」というだけのことなのですが、それぞれの特徴を長所とするか短所とするかで人間関係が変化し、それに伴いデザインも変化します。

私は、日本人であることにプライドをもちます。作品の題材が日本でない限り日本的な要素をデザインに取り入れることはなく、日本を売りにすることもしませんが、私という「日本人」がデザインを通してどのように社会貢献できるかに重点を置いて活動しています。アメリカでの生活を今後も選び続けたとしても、眠っている間は日本の夢を見るのでしょうか。